ワークショップ

医薬品の添付文書およびインタビューフォームの活用について

波多江　崇（中国学園大学　現代生活学部　人間栄養学科　教授・博士(医学)・薬剤師/元神戸薬科大学　准教授・博士(医学)）

1990年代に本邦にEvidence-Based Medicine（EBM）の概念が紹介され、日常業務にEBMの考え方が浸透してきたことから、薬剤師もエビデンスに基づいた薬剤師業務を実践するだけの情報リテラシーを身につける必要に迫られています。

現在、EBMに関連して、国や医師や看護師などの他の職種から薬剤師に求められているものは2つあります。

1つは膨大な情報の中から目的に適した情報を収集し、収集した情報を吟味した上で、医療に用いるという現時点で存在するエビデンスを適切に活用すること。もう1つは、薬剤師自身も臨床研究を行って論文を執筆し、新しいエビデンスを創出することです。

多くの薬剤師にとって論文の執筆は容易なことではなく、短期間でスキルが身につくものではありません。しかし、業務にエビデンスを活用することは、日々の業務の中で必要とされるスキルであり、ポイントをつかんで複数の症例で経験をすることでスキルを身につけることは可能です。

本来、医療用医薬品では、添付文書およびインタビューフォームが整備されており、薬学生および新人薬剤師のみなさんにとっては、まず、これらから情報を得ることができるようになることが重要です。現在、ガイドライン等に引用された英語論文を読みこなすための勉強会などが全国で開催されていますが、添付文書およびインタビューフォームから必要な情報を検索するような勉強会はほとんどありません。

筆者は、2015年から全国各地で、症例を用いた添付文書およびインタビューフォームの活用方法に関する講演を実践演習形式で行ってきました。

そのために作成した様々な場面を想定して症例を多数蓄積しております。

そこで今回は、薬学生や新人薬剤師のみなさんも多数参加されることを想定し、基本的な症例に焦点を当て、医師や看護師などの医療スタッフあるいは患者から薬の適正使用に関する問い合わせを受けた際に、添付文書やインタビューフォームを使って対応する方法を2つの症例を用いた演習形式で体験していただきます。

現場経験を数年積まれた方の中には『今さら、添付文書やインタビューフォームなんて』と思っている方も多いかと思いますが、まずは演習を楽しんでいただき、現時点でどの程度のスキルが身についているのかを確認する良い機会として、本ワークショップをご活用ください。

学歴　1994年03月　福岡大学薬学部薬学科卒業
学歴　1996年03月　福岡大学大学院薬学研究科博士前期課程修了
学歴　2001年02月　佐賀医科大学大学院医学研究科博士課程修了
職歴　2000年04月　西九州大学健康福祉学部健康栄養学科専任講師
職歴　2001年04月　西九州大学健康福祉学部健康栄養学科助教授
職歴　2007年04月　(有)健康倶楽部調剤薬局グループ
職歴　2009年04月　奥羽大学薬学部医療薬剤学専任講師(実務家)
職歴　2012年02月　神戸薬科大学薬学臨床教育センター准教授(実務家)
職歴　2019年04月　中国学園大学現代生活学部人間栄養学科教授